「茶漉」で見る複合動詞「―回す」と「―回る」のV1＋V2結合

杉村　泰　名古屋大学

1．はじめに

本稿は複合動詞「―回す」と「―回る」の前項動詞の特徴について、日本語用例・コロケーション抽出システム「茶漉」を利用して記述したものである。その結果、「―回す」の上位には「見回す」、「撫で回す」、「掻き回す」が来て、「―回る」の上位には「歩き回る」、「見回る」、「駈け回る」が来ることを明らかにし、それぞれの複合動詞の特徴について論じた。

2．「茶漉」について

2.1. 「茶漉」の概要

「茶漉」はパデュー大学の深田敦教授によって開発された日本語用例・コロケーション抽出システムで、ウェブ上で簡単に利用できる言語研究ツールである。「茶漉」はコーパスを検索可能なデータファイルに変換する段階で、形態素解析システム「茶筌」（奈良先端科学技術大学院大学自然言語処理学講座開発）を用いている。そのため、茶筌を用いて立てたお茶（データ）から必要な情報のみを漉し取って取り出すシステムという意味で「茶漉」と名付けられている。「茶漉」のコーパスには「講談社ブックス」、「講談社ブルーバックス、白書、学校教科書など（CASTEL/J 作成）」、「寅さんシナリオ（松竹映画『男はつらいよ』シリーズのシナリオ集、CASTEL/J 作成）」、「毎日新聞（1991～1999年）」、「青空文庫（http://www.aozora.co.jp）から抽出した小説」、「名大会話コーパス」が収蔵されている。このうち、一般公開版では「青空文庫」と「名大会話コーパス」の二つが利用できるようになっている。

「茶漉」を利用すると日本語のコロケーションが抽出できるのみならず、「ｔスコア」、「MI スコア」、「G スコア」、「コーパス頻度」、「スパン頻度」、「期待頻度」も自動的に計算してくれる。さらにこれらを昇順、降順の両方で並べ替える機能もついている。「茶漉」（一般公開版）の URL は以下の通りである。

「茶漉」（一般公開版）　http://tell.fll.purdue.edu/chakoshi/public.html

2.2. 「茶漉」の利用方法

「茶漉」の利用方法は次の通りである。詳しい「マニュアル」は上記ウェブページの中に書いてある。

①コーパス指定

「青空文庫」と「名大会話コーパス」の両方または片方を選ぶ。

②検索パターン設定

検索キーワードの「前○語」、「後○語」のように任意の数字を入れ、コロケーションを持つ語を探す範囲を設定する。

③検索語の設定

キーワードの前３語（－3～－1）、キーワード（kw）、キーワードの後３語（＋1～＋3）の７語（正

確には7形態素）が設定できる。それぞれ「語形」や「品詞」を入力し、その入力したものを「含む」のか「除外」するのかを選択する。さらに、活用語については「全活用形」を一括検索するかどうかが選択できる。

④コロケーション出力設定

まず出力フィルタでコロケーション強度の計算に含める語を制限する。これも「語形」や「品詞」を入力し、それらを「含む」のか「除外」するのかを選択する。活用語の場合は、「活用形をまとめて集計する」のかどうかを選択する。次にtスコアとMIスコアの閾値を設定する。既定ではtスコアは2.0、MIスコアは3.0に設定されている。

⑤kwic出力設定

語数指定あるいは文数指定を選択し、語数指定なら「前○語」、「後○語」、文数指定なら「前○文」、「後○文」のように任意の数字を入れる。文数指定で「前0文」、「後0文」と設定すれば、キーワードを含む文のみを全文表示することになる。

2.3. 本研究における「茶漉」の設定

本研究では複合動詞「—回す」と「—回る」を対象に、以下のように「茶漉」を設定して検索を行った。

①コーパス指定：「青空文庫」のみを選択（コーパス総形態素数＝8,370,720）

②検索パターン設定：前1語、後0語

③検索語の設定

・−3〜−2：未設定

・−1：品詞：動詞（含）

・kw：「回す｜まわす（全活用形）」および「回る｜まわる（全活用形）」
（漢字表記とひらがな表記の両方を検索）

・＋1〜＋3：未設定

④コロケーション出力設定

・出力フィルタ：未設定

・活用形をまとめて集計する：チェックを入れる

・tスコア閾値：0（全ての例を拾うため）

・MIスコア閾値：0（全ての例を拾うため）

⑤kwic出力設定：文数指定　前0文、後0文（キーワードを含む文のみ全文表示）

3.「—回す」の前項動詞の特徴

まず、複合動詞「—回す」について上記2.3の条件で検索した。その結果、「茶漉」の画面には444の例文が出現し、「—回す」の前項動詞として54の形態素が表示された。しかし、「茶漉」は形態素の解析に「茶筌」を使っているため、「茶筌」で誤った形態素解析をすると、それがそのまま表示されてしまう。そのため、444の例文を一つ一つ目で見て、次のような修正を行った。

・「ける」（3例）は「跟（つ）ける」の「け」を誤って一語の動詞として解析したものであるため「跟ける」として数えた。

・「つく」（1例）は「突ッつく」の「つく」を一語の動詞として解析したものであるため「突っつく」として数えた。

・「摺る」（1例）は「曳き摺る」の「摺る」を一語の動詞として解析したものであるため「曳き摺る」として数えた。

・「きる」（1例）は「こずき」（小突き）の「き」を誤って一語の動詞として解析したものであるため「小突く」に含めて数えた。
・「さる」（1例）は「さるまわし」（猿回し）の「さる」を誤って動詞として解析したものであるため削除した。
・「取る」（1例）は相撲で力士がつける「取まわし」の例であるため削除した。
・「立て回す」（3例）と「建て回す」（2例）はいずれも「屏風をたてまわす」の例であるため、「立て回す」にまとめて集計した。同様に、「引っ掻く」と「ひっかく」、「嘗める」と「舐める」と「なめる」、「追いかける」と「追っかける」、「弄る」と「いじくる」なども表記が違っても同じ動詞であるとして、一つにまとめて集計した。
・444例中「引きまわし」（3例）と「（家の）切りまわし」（1例）の2例は名詞の例であるため、集計から除外した。

なお、「茶筌」の形態素解析では、「振り回す」と「振りまわす」はそれぞれ1語として数えるのに対し、「ふり回す」と「ふりまわす」はそれぞれ2語として数えるというようなことをする。この点については、畠山（2008）にも「茶漉」を使って複合動詞の用例を抽出する際の注意が指摘されている。ただし、本稿では畠山（2008）と同様に、便宜的に2.3で示した設定によって出現した用例のみを議論の対象とすることにする。

以上の修正を加えた結果、「茶漉」から全437例、前項動詞の異なり語数で48語の「―回す」を抽出することができた。これを前項動詞の出現数順に示すと表1のようになる。

表1　「―回す」の前項動詞（全38語）

	前項動詞	出現数		前項動詞	出現数		前項動詞	出現数
1	見る	230	14	逐う	4	27	切る	1
2	撫でる	36	〃	睨める	4	〃	えぐる	1
3	掻く	27	〃	振る	4	〃	こねる	1
4	小突く	18	〃	引っぱる	4	〃	突っつく	1
5	眺める	17	18	引く	3	〃	ねぶる	1
6	引っ掻く	10	〃	跟ける	3	〃	云う	1
7	考える	9	〃	結う	3	〃	見せる	1
8	ひねくる	8	〃	探る	3	〃	使う	1
〃	いじくる	8	〃	追いかける	3	〃	思う	1
〃	嘗める	8	23	いじる	2	〃	尋ねる	1
11	睨む	6	〃	引きずる	2	〃	曳き摺る	1
12	張る	5	〃	拭う	2	〃	売る	1
〃	立てる	5	〃	折る	2			

表1を見ると、「―回す」の前項動詞はいずれも対象にヲ格を取る動詞であり、全体の半数以上を「見回す」が占め、次いで「撫で回す」、「掻き回す」、「小突き回す」、「眺め回す」の順になることが分かる。これらの「―回す」には次のような用法がある。

①対象をV1して回転させる

次の(1)は双眼鏡をひねくって回すこと、(2)はお湯を掻いて対流させること表している。(3)は(2)の派生で、部屋の中の物品を当たり構わず取り出して散乱させることを表している。その次の(4)は手首の回転により短刀をあちこちに動かすさまを表している。(5)は(4)から派生して、家柄や権威などを武器にして必要以上に相手に振りかざすことを表している。

(1) そうして嬢次少年の仕事を手伝うこと以外に何等の緊張も、危険も感じないまま双眼鏡をひねくりまわしているに過ぎなかった。(夢野久作『暗黒公使（ダーク・ミニスター）』)
(2) お湯をじゃぶじゃぶ掻きまわして、子供の振りをしてみても、なんとなく気が重い。(太宰治『女生徒』)
(3) 留守に何度も何度も刑事が来て、この部屋を掻きまわしていったそうだ。(太宰治『火の鳥』)
(4) そう思いながら、あてもなく短刀をふり回していると、「間(はざま)！　切れ！」と、大石がいった。(菊池寛『吉良上野の立場』)
(5) 今の華族なんて奴は妙に家柄や何かを振まわすが、その振まわす根性といったら実に軽薄なものなんだ。(夢野久作『超人鬚野博士』)

②対象をV1して何かの周囲を囲う

次の(6)は玄関先に注連を張って巡らすこと、(7)は家の周りに垣根を結って巡らすこと、(8)は娘たちの周りに屏風を立てて囲うことを表している。

(6) 新らしく作り直したらしく門柱には神教祈祷所という大きな札がかけられて、玄関先に注連が張りまわしてあった。(岡本綺堂『半七捕物帳　女行者』)
(7) むさし屋の女の云った通り、近所に遠い畑のなかに二軒の藁葺き屋根が隣り合っていて、外には型ばかりの低い垣根が結いまわしてあった。(岡本綺堂『半七捕物帳　大森の鶏』)
(8) 内へあがると、やはり近所の人らしいおかみさんや娘が四、五人ごたごた坐っていて、逆さに立てまわした古い屏風のかげからは線香の煙りがうず巻いて流れていた。(岡本綺堂『両国の秋』)

③動作主の視線が回転して周囲を見る（V1）

上の①と②の用法の場合、対象自体が回転したり、何かの周囲を囲ったりすることを表すのに対し、この用法は対象ではなく動作主の視線が回転して周囲を見ることを表す。次の(9)～(11)においても、回っているのは「あたり」や「一座」や「温泉ホテル」ではなく、動作主の視線である。(「見上げる」、「見下ろす」と同様)

(9) カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』)
(10) 和田は酔眼を輝かせながら、声のない一座を見まわした。(芥川龍之介『一夕話』)
(11) あの有名な温泉ホテルこそは、私が校長先生に復讐を思い立つ前から、好奇心に馳られて、何度も何度も学校の帰りに温泉鉄道に乗って行って、裏から表から眺めまわして、詳しく探検していた家でした。(夢野久作『少女地獄』)

④対象（有情物）をV1してあちこち移動させる

次の(12)は人間を引っ張って山の中をあちこち引き連れること、(13)は馬と犬が道化男を追ってあちこち逃げさせることを表している。この場合、主体や対象が一直線に移動するときには「引っ張りまわす」、「追い回す」などというのは不自然で、「引っ張っていく」、「追いかける」などというのが自然である。したがって、⑤の「―回す」は直線的にではなく、あちこち方向を変えながら移動するという意味になる。

(12) お前たちの身体をどんなに立派に作りかえても、心が立派にならなければ何もならないと思ったから、わざと両親が恋しくなるようにこんな山の中をいつまでも引っぱりまわしたのだ。(夢野久作『豚吉とヒョロ子』)
(13) そうして二匹とも今度は勘弁ならぬという体で逐いまわし初めた。(夢野久作『暗黒公使(ダーク・

ミニスター)』)

また、次の⒁〜⒃は、V1自体は視覚を表す動詞ではないが、「探るように見る」、「舐めるように見る」という意味で使われているため、④の「―回す」に含めて考えることができる。

⒁　ミルキ閣下は目を皿のようにして、アネットの全身をジロジロと探りまわした。(海野十三『十八時の音楽浴』)

⒂　狡く目を閉じたまま、嗅覚で若い看護婦の全身を舐めまわしている半平であった。(海野十三『幸運の黒子』)

⒃　同僚の面前にのっそり立ちふさがり薄目つかって相手の顔から、胸、胸から脚、脚から靴、なめまわすように見あげ、見おろす。(太宰治『虚構の春』)

⑤V1の行為を繰り返し行う

この用法は影山(1993:111)にも出てくるが、そこでは「項構造で補文関係を要求すると思われるV2」の例として「撫で回す」など8つの語が列挙してあるのみで、意味的な考察はなされていない。そこで本稿では意味の面に踏み込んで考察することにする。次の⒄は木像を何度も撫でること、⒅は辰蔵を何度も小突くこと、⒆は鉛筆を何度も舐めること、⒇は唇を何度も嘗めることを表している。しかし、「―回す」を使った場合、単に動作を繰り返し行うのみでなく、「対象の様々な部分に接触して、対象を動かす」という場合に用いられやすい。したがって、「*鉛筆の先端を舐め回す」のように同じ箇所に何度も触れる場合や、「*君が代を歌いまわす」、「*一日にサインを100枚書き回す」のように対象の移動を伴わない場合には、繰り返し動作でも「―回す」は使いにくい。これは本動詞「回す」の回転の意味が生きているためであると考えられる。

⒄　半七はその木像を撫でまわして、更に二、三ヵ所嗅いでみた。(岡本綺堂『半七捕物帳　蝶合戦』)

⒅　馬子は辰蔵の胸ぐらを引っ掴んで小突きまわすと、辰蔵も半纏をぬいで起ち上がった。(岡本綺堂『半七捕物帳　鷹のゆくえ』)

⒆　巡査も吹き出しそうになりながら、ヤケに鉛筆を舐めまわした。(夢野久作『いなか、の、じけん』)

⒇　田宮は唇を嘗めまわしては、彼等二人を見比べていた。(芥川龍之介『奇怪な再会』)

⑥V1の行為を繰り返すことにより、事態を適切な方向に活性化させる

次に挙げる「―回す」はV2自体に接触の意味はないものの、何度もその行為を繰り返すことにより、事態を適切な方向に活性化させる意味を表している。(21)の「考え回す」と(22)の「思い回す」は頭の中で思考をめぐらすことを表している。(23)の「言い回す」は言葉を駆使して主体の意にかなうように相手に意思を伝えることを表している。(24)の「使い回す」は対象を何度も使うことにより、無駄なく利用することを表している(親を使い回すのがいいことかどうかは別の話である)。(25)の「切り回す」は主体がいろいろと切りもりをして、当該の事態が順調に回転するように処置することを表している。

(21)　一知は中学時代からマユミを恋していた。そうしてマユミを中心にした自分の一生涯の幸福の夢を色々と描いていたが、しかし生れ附き内気な、臆病者の一知はそんな事をオクビにも出さずに、どうかしてマユミを吾が物にしたいと明け暮れ考えまわしているだけであった。(夢野久作『巡査辞職』)

(22)　じゃ、いろいろ思いまわしたのが自分の邪推であったろうか、邪推としたら自分は厭な性質をもっ

ている。（近松秋江『うつり香』）

(23) それらの事情をうまく云いまわせば、彼は単に叱り置くぐらいのことで、ほんとうの科人にはならないかも知れない。（岡本綺堂『半七捕物帳　大阪屋花鳥』）

(24) とんまな両親のしていることがもどかしくッて、もどかしくッてたまらないという風に、自分が用のない時は、火鉢の前に坐って、目を離さず、その長い頤で両親を使いまわしている。（岩野泡鳴『耽溺』）

(25) 権高に店員をしかっているあんばい、むろんこの家の娘にちがいないが、どうやら店のこと、金の出入りの采配も、その娘が切りまわしているらしい様子でした。（佐々木味津三『右門捕物帖　左刺しの匕首』）

以上、複合動詞「―回す」は本動詞「回す」の回転の意味を保ちながら、様々な用法に分化していることを指摘した。

次に「―回す」のコロケーション情報について、MIスコアの高いものから上位10語を示すと表2のようになる。（「茶漉」では漢字表記とひらがな表記を区別して計算するため、ここでは両者を区別したまま示してある。）MIスコアはある形態素ともう一つの形態素とが共起する確率と、それぞれが個別に生起する確率との比を表すものである。一般にMIスコアの値が大きいほど共起関係が強いとされているが、本コーパスはコーパス規模がさほど大きいわけではないため、必ずしも正確に共起関係の強さが反映されているとは限らない。したがって、これらの動詞は「―回す」との共起が強い可能性があることを指摘するにとどめておく。

表2　「―回す」のコロケーション情報（MIスコアの上位10語）

形態素	tスコア	MIスコア	コーパス頻度	スパン頻度	期待頻度
ねぶる	1.000	13.74	1	1	0.0001
引掻く	1.414	13.74	2	2	0.0001
小突く	3.316	13.50	13	11	0.0007
ひねくる	2.828	13.15	12	8	0.0006
ひっかく	2.000	12.93	7	4	0.0004
こづく	2.449	12.87	11	6	0.0006
引っ掻く	2.000	12.74	8	4	0.0004
いじくる	2.645	12.46	17	7	0.0009
掻く	5.194	10.82	204	27	0.0108
撫でる	5.475	10.66	254	30	0.0135

4.「―回る」の前項動詞の特徴

次に、複合動詞「―回る」について上記2.3の条件で検索した。その結果、「茶漉」の画面には376の例文が出現し、「―回る」の前項動詞として73の形態素が表示された。しかし、「茶漉」は形態素の解析に「茶筌」を使っているため、「茶筌」で誤った形態素解析をすると、それがそのまま表示されてしまう。そのため、376の例文を一つ一つ目で見て、次のような修正を行った。

・「井戸ばた へ 回る」、「たけのこめし へ 回る」、「かげ へ まわる」の3例は「回る」の前が格助詞「へ」なので除外した。（「コロケーション情報」の表には出現せず）

・「くるっ と まわる」（3例）は「回る」の前が副詞の語尾「と」なので除外した。（「コロケーション情報」の表には出現せず）

・「承る」（3例）は「承まわる」の「承」を一語の動詞として誤って解析したものであるため除外した。(「コロケーション情報」の表には出現せず)
・「境の故郷 い まわり」を除外した。(「コロケーション情報」の表には出現せず)
・「見回る」(37例）のうち8例は名詞の「見まわり」の例であるため集計から除外した。
・「匐（は）い回る」（5例）は用例欄には出現するものの「コロケーション情報」の表には出現していないため「這う」に含めて集計した。
・「掻く」（2例）は「藻掻く」の例であるため「もがく」として集計した。
・「ける」（2例）は「馳（か）ける」の「ける」を誤って一語の動詞として解析したものであるため「駈ける」に含めて集計した。
・「打つ」（7例）のうち6例は「のたうち回る」の例であるため、「のたうち回る」に含めて集計した。
・「駈ける」と「駆ける」と「かける」、「這う」と「はう」、「転がる」と「ころがる」、「のた打ちまわる」と「ノタ打ちまわる」と「のたうちまわる」などは表記が違っても同じ動詞であるとして、一つにまとめて集計した。

以上の修正を加えた結果、「茶漉」から全358例、前項動詞の異なり語数で60語の「―回す」を抽出することができた。これを前項動詞別に出現数を示すと表3のようになる。

表3　「―回る」の前項動詞（全60語）

	前項動詞	出現数		前項動詞	出現数		前項動詞	出現数
1	歩く	53	21	嗅ぐ	3	〃	引っかける	1
2	駈ける	38	〃	飲む	3	〃	窺う	1
3	見る	29	〃	探る	3	〃	下げる	1
〃	這う	29	24	はしゃぐ	2	〃	滑る	1
5	探す	23	〃	叫ぶ	2	〃	泣く	1
6	逃げる	21	〃	尋ねる	2	〃	荒れる	1
7	走る	13	〃	もがく	2	〃	照らす	1
〃	騒ぐ	13	〃	動く	2	〃	笑う	1
9	泳ぐ	11	〃	這いずる	2	〃	訊く	1
10	狂う	9	〃	縫う	2	〃	吹く	1
〃	のたうつ	9	〃	踊る	2	〃	調べる	1
12	跳ねる	8	〃	荒らす	2	〃	追う	1
〃	立つ	8	33	打つ	1	〃	掴む	1
14	覗く	7	〃	あさる	1	〃	転ぶ	1
15	遊ぶ	6	〃	うろつく	1	〃	拝む	1
〃	暴れる	6	〃	かせぐ	1	〃	並べる	1
〃	転がる	6	〃	たたく	1	〃	歩む	1
18	転げる	5	〃	(後を)つける	1	〃	鳴く	1
〃	持つ	5	〃	履く	1	〃	躍る	1
20	馳せる	4	〃	よろめく	1	〃	頼む	1

表3を見ると、「―回る」は1位に「歩き回る」が来て、次いで「駈け回る」、「見回る」、「這い回る」、「探し回る」の順になるというように、対象の形態的・位置的変化に焦点が当たる他動詞ではなく、動作主の状態変化に焦点が当たる他動詞や非能格自動詞が来やすいことが分かる。これに関して、影山（1993：51、121）では「―回る」の前項動詞について次のような制限のあることが指摘されている。

(26) ～回る（非能格自動詞）

非能格＋回る：暴れ回る、歩き回る、動き回る、逃げ回る

他動詞＋回る：探し回る、買い回る、荒し回る、ふれ回る

非対格＋回る：（風が）*吹き回る、*落ち回る、*流れ回る

次に「―回る」の意味について見る。「―回る」には次のような用法がある。

①動作主がV1の移動行為によってあちこち移動する

次の(27)は私がりんご畑の中を歩いてあちこち動くこと、(28)は鼠が台所の中をあちこち駈けめぐること、(29)は女があちこち逃げながら移動することを表している。いずれの場合も、「―回る」の動作主は一直線に動くのではなく、あちこち方向を変えて移動することを表している。この点で先の「―回す」の④と共通した性質を示している。

(27) 君を木戸の所まで送り出してから、私はひとりで手広いりんご畑の中を歩きまわった。（有島武郎『生まれいずる悩み』）

(28) 薄暗い台所では鼠の駈けまわる音がときどきに聞えた。（岡本綺堂『半七捕物帳　猫騒動』）

(29) 女は悲鳴をあげて逃げまわるのを、かれは執念ぶかく追いまわした。（岡本綺堂『半七捕物帳　大森の鶏』）

②動作主がV1の状態であちこち移動する

次の(30)～(32)は動作主がのたうち、はしゃぎ、騒ぎながらあちこち移動することを表している。

(30) たまらなくコミ上げて来る笑いと一緒に、身体をよじって腹を押えて、しまいには畳の上にたおれてノタ打ちまわりながら、ヒステリー患者のように笑いつづけた。（夢野久作『あやかしの鼓』）

(31) ああ息子は居間に籠り勝ちでありましたが、彼女はいたって快活で、もう三カ月も滞在していることとて、旅館の中をわがもの顔にはしゃぎまわり、のちにはわたしたちの部屋へも遠慮なく入ってきて長い間とりとめのない世間話をしていきました。（小酒井不木『メデューサの首』）

(32) 逃げた芸妓さん達が、着物を着てからホテルの人に知らせたものと見えまして、下の方で誰だかガヤガヤと騒ぎまわる声がしました。（夢野久作『少女地獄』）

③動作主がV1の行為をしながらあちこち移動する

次の(33)～(37)は動作主が遊んだり、歩哨を見たり、提灯を照らしたり、お金を稼いだり、兇器を持ったりしながらあちこち移動することを表している。

(33) 或る日の事、小僧は只一人で山の中を遊びまわっていると、思わず遠方まで来て一つの湖の傍へ来た。（夢野久作『猿小僧』）

(34) わがある部隊の大隊長青木少佐は、畑の中に立っている歩哨を見まわって歩きました。（新美南吉『張紅倫』）

(35) 二坪にも足らない小池のまわり、七度も八度も提灯を照らし回って、くまなく見回したけれども、下駄も浮いていず、そのほか亡き人の物らしいもの何一つ見当たらない。（伊藤左千夫『奈々子』）

(36) 俺ら若い時にゃ、忠次の兄いと一緒に、信州から甲州へ旅人で、賭場から賭場をかせぎ回ったもんだ。（菊池寛『入れ札』）

(37) 頼みの綱はコレ一つ……兇器さえ見付かればこっちのもの……東京市中を持ちまわって、一軒一軒虱潰しに出所を調べてまわっても構わない覚悟で、飯田町一帯の材木置場の隅から隅まで鋸屑を掻きまわしたもんだ。(夢野久作『近眼芸妓と迷宮事件』)

④「立ち回る」

「立ち回る」は本動詞「立つ」の意味が現れず、上の①～③のどれにも分類しにくいため、独立して項目を立てる。「立ち回る」にはまず(38)のように「立ち寄る」の意味で使われるものがある。この場合、単にその場所に来ることだけでなく、他の場所にも立ち寄って来ることを含意している。この点で「あちこち移動する」という他の「―回る」と共通した意味を持っている。また、「―回る」にはもう一つ(39)のように「立ち振る舞う」の意味で使われるものがある。この場合も、一つの振る舞いをするだけでなく、あちこちの場所で様々に振舞うことを含意している。この点で他の「―回る」と共通した性質を備えている。

(38) 「おなじ店へ二度とは来めえと思うが、その女がもし立ちまわったらば、すぐに自身番へ届けてくれ」(岡本綺堂『半七捕物帳　妖狐伝』)

(39) なにもおいらは意地わるく立ちまわって、てがらをひとり占めにしてえわけじゃねえんだからな。(佐々木味津三『右門捕物帖　のろいのわら人形』)

次に「―回る」のコロケーション情報について、MI スコアの高いものから上位10語を示すと表４のようになる。これらの動詞も「―回る」との共起が強い可能性のある動詞であると指摘するにとどめておくことにする。

表４　「―回る」のコロケーション情報（MI スコアの上位10語）

形態素	t スコア	MI スコア	コーパス頻度	スパン頻度	期待頻度
這いずる	1.414	11.63	4	2	0.0002
のたうつ	1.732	10.76	11	3	0.0005
転げる	1.999	9.93	26	4	0.0012
くるう	1.000	9.83	7	1	0.0003
這う	4.581	9.46	189	21	0.0085
うろつく	1.000	9.46	9	1	0.0004
泳ぐ	3.315	9.41	103	11	0.0046
転がる	1.999	9.17	44	4	0.0020
あさる	0.999	9.05	12	1	0.0005
歩く	7.276	8.95	682	53	0.0306

５．おわりに

本稿では日本語用例・コロケーション抽出システム「茶漉」を利用して、複合動詞「―回す」と「―回る」の前項動詞の特徴について記述した。この結果をもとに、さらに大規模なコーパスを利用して「―回す」と「―回る」の特徴を明らかにしていきたい。

参考文献

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

畠山　衛（2008）「「茶漉」による書き言葉の中の複合動詞の分析」『15th Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings』pp. 19–33